

教師を育てた 言葉たち

No. 018

石川県立金沢桜丘高校 崎山寛之先生

さきやま・ひろゆき

◎教職歴9年。同校に赴任して1年目。数学科担当。「石川県高等学校教育課程研究会(数学)」や「金沢工業大学第16回数理工教育セミナー」などの研究会で発表を行うなど、小・中学校や高校の教師と積極的に情報交換を行い、授業力向上に努めている。



初 任校は、勉強に苦手意識を持つ生徒が多い学校でした。教えることが好きで教師を目指した私は教材研究に勤しみ、4年目にはある程度、生徒のつまずきを予測して授業ができるようになりました。そんな頃、ある生徒から「なぜ、数学を勉強しなければいけないのですか」と問われたのです。私は、「数学ができないままだと卒業できないよ」と答えながら、「聞いているのはそんなことじゃないのだろうか」と思いました。しかし、その時は、そう答えることしかできませんでした。

なぜ、数学を勉強しなければいけないのか。生徒が納得する答えを求めて、同僚や先輩に相談しました。ある時、先輩が、「educationの語源は、“引き出す”、“養う”、という意味の言葉だ」と、私に教えてくれました。教師が解き方を分かりやすく教え、生徒にそれを確実に理解させるのが教育ではないのか？ますます分からなくなってしまった私は、生徒と話してみたくなり、休み時間に「今日の授業はどうだった？」などと聞いてみることにしました。

生徒と話するうちに分かったのは、理解できていると私が思った生徒が、実は理解が不十分であるなど、私の手応えと生徒の実態が必ずしも一致していなかったということです。授業に自信を持てるようになった半面、生徒の反応に鈍感になっていたのかもしれない、授業中の生徒をもっと丁寧に見ていこう……そう考えるようになってから、私の授業スタイルは、「分かりやすく説明する授業」から「大事なことは生徒に表現させる授業」へと変わりました。

8 年間の初任校での勤務を経て、金沢桜丘高校に転動しました。難関大学志望者が多い学校で、生徒の期待に応えられるようなレベルの高い授業をしようと張り切りましたし、実際、生徒は真剣に私の説明を聞いてくれました。ただ、不思議なくらいに生徒から反応が返ってこないのです。何回目かの授業を経てようやく私は、自分の授業が、大事なことを一方的に生徒に伝えるものになっていたことに気がつきました。大事なことは、教師が伝えるのか、生徒に表現させるのか、その違いで授業の様子は変わります。前任校の授業スタイルに戻すと、次第に生徒から反応が返ってくるようになりました。

授業の感想も積極的に聞くようにしたところ、ある生徒から、「説明と説明の間に、ノートを整理する時間がほしい」と言われ、早速次の授業では、説明が一区切りしたら、1分間、何も話さないようにしました。集中できる授業を生徒から教えてもらったのです。教師にとっては「**生徒の反応がすべてである**」という、私のその後の指導の道標となる言葉は、まさに生徒が与えてくれたものでした。

も しも今、「なぜ、数学を勉強しなければいけないのですか」と生徒に問われたら、私は「幸せになるために」と答えるでしょう。幸せに生きるためには、多角的に物事を考える力が必要であり、数学はその力を育むのに最適な教科だと思います。そして、これからも、日々の疑問や課題と数学とを結びつけた授業を模索しながら、生徒に「今日の授業はどうだった？」と尋ね続けていきます。

石川県立金沢桜丘高校 全日制/普通科/共学/1学年約360人/2019年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、金沢大、名古屋大、京都大、大阪大などに217人が合格。私立大は、東京理科大、同志社大、立命館大などに延べ619人が合格。